

一九七七年二月一日第三種郵便物認可

発行所 社会通信社 発行人 滝野 忠

東京都渋谷区本町六丁目二八の二コーポル幡ヶ谷九〇四 電話(03)3377-4649 FAX(03)3299-5367
振替 〇〇一〇〇一九一五八四三一 労金 東京労金本店 No.1154163

購読料 月額600円 6ヵ月前納制

〈もくじ〉

■巻頭言■

滝野 忠……………2

現代の「長期抵抗・統一路線」

勝利に向けて体制強化を！

国労名寄闘争団……………3

—十年間の到達点を踏まえ前進しよう—

様変わりした連合メーデー……………4

—来年メーデーは四月二十九日—

◇新潟県新津市からの報告◇……………5

またウソを重ねるのですか……………5

—許せない！保育所統合前の約束破り(下)—

◇ドキュメンタリー映画(羽田澄子監督作品)◇……………7

『続・住民が選択した町の福祉 問題はこれからです』……………7

「茨城・下館地域在宅介護を支える会」が上映

◇資料1◇ 映画 続 住民が選択した町の福祉「問題はこれからです」あらまし……………8

◇資料2◇ 鷹巣町のワーキンググループについて……………9

ゲリラ戦から正規戦へ……………13

—憲法状況の現段階(上)—……………16

読者からのおたより……………16

旬刊 社会通信

NO. 770

二〇〇〇年六月一日号

二〇〇〇年六月一日発行
(毎月一日・二日・二日三回発行)

現代の「長期抵抗・統一路線」

十代の若者、第一線活動家、経験豊かなOBが集う政治研究会から、「灰原さんを偲びたい。だから、『三池闘争とこれからの労働運動』のテーマで、問題意識を語れ」との命令があった。重い課題である。逃げたかった。「滝野さん、逃げたらダメです。私に挑戦してよ」と、灰原さんの声が聞こえてくる。

灰原さんは鶴のような容姿で鷹の鋭さをもち、敵（独占資本家階級）はむろん、味方（上部機関、仲間）にも身体ごとぶつかっていく人だった。「気迫」の人である。労働運動は、この「気迫」が原点だ。「気迫」とは「己の理想・確信・夢」を実現する想い、それを第三者に伝え、共感を得るみなぎるばかりの精神的発露である。

『三池闘争』についての本に改めて目を通した。『長期抵抗・統一路線』（社会主義協会刊、一九七二年七月二〇日）、『三池を語る』（灰原編著・一九八三年十月八日）、『三池と向坂教室―向坂逸郎・灰原茂雄往復書簡をめぐりて』（灰原編著・社会主義協会刊、一九八七年七月二五日）、『資料三池争議』（日経連広報部、一九六三年一月）、『日経連五十年史』（日経連刊、一九八九年十一月）等々、前三書について、灰原さんのサインがあり、それぞれ「これからも一緒に」、「夜明け前をともに闘う」、「感謝と敬意をこめて」と記されてある。

灰原さんは「設計技師」であった。『設計』は無から有を産み出すことを仕事とする。創造力が問われる。私の身近にも若い設計技師がいる。どう新しい建物をつくるかの希望に燃えている。灰原さんは橋の設計から社会の設計に三池炭鉱に入ってから、その方針を変えた。後に、三池炭鉱の社長となり、三池闘争で一戦を交えた栗木氏は、灰原さんが三池労組の役員となった時、「君とはこれから敵だな」と話したという。

三池労組には多くの有為の人材がいた。しかし、労働運動の「設計技師」としての灰原ぬきには、三池闘争はなかった。『長期抵抗・統一路線』にある諸論文、そして資料として納められている『炭労・賃金闘争自己批判書』（一九五三年三月六日）、『英雄なき一―三日の闘い』から―全国三井炭鉱労働組合連合会闘争白書』（一九五四年六月）、『長期抵抗路線―展望を明らかにして反撃に転ずる決意と構えを確立しよう』（一九六二年四月）は、灰原さんなくしては、構想されなかつたらうことは明らかだ。

灰原さんはつねに「次の準備」（戦略はむろん戦術）を考えた。それを、われわれに「総括することが大事」と強調した。総括とは「闘い」を反省し、次の一步をふみ出す準備である。『社会通信』の「灰原茂雄さんを偲ぶ」の特集は、灰原さんがいかに活動家の心をとらえたかについて、すべての人が書いている。われわれに欠けていたのは、灰原さんの階級的労働運動構築への「構想力」ではなかつたのか。「総括が必要」をくり返すことではなく、「どう総括し、どう労働運動構築への展望」をさし示すか、灰原さんがつねにわれわれに望んだのはそのことであつたのではなからうか。

『三池闘争とこれからの労働運動』で、私はこのテーマを論じてみたいと思う。灰原さんの遺志に応える途は、現代情勢における「長期抵抗・統一路線」であるからである。

（滝野 忠）

勝利に向けて体制強化を！

——十年間の到達点を踏まえ前進しよう——

原点にもどって再確認を！ 四月一日、闘争団発足から残念ながら九十年という大きな節目を迎えた。

この十年間、アルバイトをしながら家族とともに生活し闘い続けてきた成果は大きいものがあるが、一方で十年間闘い続けてきたのに解決に至らなかった不十分さ、体制の充実・強化に向けた一人ひとりの意識とがんばり等、まだまだ課題はたくさんある。

闘争団発足当初から、貸付金の問題、全国オルグ・上京行動の参加、一日一度は団に顔を出そう等々、さまざまな確認や各種制度を確立し、平等の原則を求めて体制づくりを進めてきた。十年の節目を向かえ、「あらためて闘争団で頑張っているのか」を問い返し、これまでの総括から到達点を確認し、全面勝利に向けた体制の充実、闘いの強化をはからなければならぬ。

この間、名寄闘争団として確認してきた組織・財政関係について、若干の見直しも行ない、全体で再度確認するため、専門部会・執行委員会で検討中。団として収入や運動面でのレベルアップをはかっていくことで、新たな制度や貸付金の増額をはかり、敵の攻撃に負けない磐石の体制を確立し納得の出来る解決を勝ち取っていかう。

パートも採用、サンピア奮闘 団員の協力のもと、三月に物置きを取り壊し、プレハブを設置しクリーニングの繁忙期を迎えているサンピア。修繕前に繁忙期を迎えていたらと考えるとゾツとする思いになる程洗濯物の山に出田氏を中心に埋もれている。四月までは西原・多田両氏が応援に入っていたが、五月からは谷津氏の同級生の「和田さん」にバイトでお手伝い頂くことに。箱トラックも新しくなり、木村・橋本両氏も今までいつエンストするか分からない不安を解消、反面汚れないように、事故らないようにと少し緊張しながら、気分も新たに奮闘している。陰の大番頭荒矢氏は、ワイズのお客さんを離さないように必死に駆け回り、マリリンちゃんにも気に入られて大忙しの毎日。

米の販売許可申請も無事に終え、六月から大々の販売に取り組みするため準備を進める谷津氏である。

配置業も奮闘 前回の衆議院選挙の関係ではじめた配置業事業も、全体の拡大努力も取り組みながら三年半が経過しているが、四月からは西根氏一人での対応となって、新たな形で動きはじめている。現行の売り上げ実績をさらに伸ばすため、詐欺師顔負けの営業マンとして東奔西走。（もしかしたら本当は詐欺師なのかも？）北見「クスリのナカムラ」本社からも叱咤激励されながら、当面は純益で月三十万の目標をクリアすると頑張っている。

新規業務委託も、ペットボトル処理 四月からゴミの分別細分化がスタートし、ペットボトルの圧縮・梱包作業をサンピアとして名寄市から業務依託を受け、四月四日から作業をはじめている。ペットボトルは広域処理ということで、近隣の自治体からも集められ、年間で四十トン以上の処理計画となっている（一日二四〇kg）が、働き過ぎなのか一日五頁kg前後を処理している。フォークリフトで積み上げていくため、資格を持った橋本・佐久間両氏も悪戦苦闘しながら、作業場内を運転している。とくに佐久間氏はペーパードライバーのため瘦せる思いだとか。

五月から川口次長も開発の運転手に入る等、事務所が手薄になるため、家族にも手伝っ

でもらう予定であるが、状況によって団員の協力も必要となる。(当面は一日二時間で三名、週四日の予定)。来年度からはその他のプラスチックも処理し、今年度の十倍を見込んでいるとのことで、継続して業務委託を受けていくため、とにかく今年度は信用を売るつもりで作業にあたっていく。

(国労名寄闘争団)

様変わりした連合メーデー

— 来年メーデーは四月二十九日 —

第七一回メーデーは、日本労働運動が第二次世界大戦後、五回目の転換点に入ったことを示した。総評結成(一九五〇年)、安保・三池闘争(一九六〇年)、生産性基準原理の提唱(一九七四年)、連合結成(一九八九年)につづく、波乱と激動の時代の始まりである。労働組合の存在感が歴史に問われる時代に入ったのである。

連合の路線は「対話重視・政策決定への参加」、つまり「政策提言型運動」だ。この路線は政府自民党、財界労務部の日経連(日本経営者団体連盟)の手厚い庇護でつくられてきた。しかし、二〇〇〇年春闘に明らかのように、自民党、日経連は連合との労資協調の余裕をなくしたのである。規制緩和、構造改革の大波が、日本政治、企業を直撃したこと、さらには連合を体制維持装置に完全に組み込んだことによって、連合に配慮する必要を感じなくなったことである。

今春闘の賃金回答は日経連調査で六千四百円(一・九七%)、日経新聞調査では五千八百六十六円(一・九四%)と、賃上げとはいえない結果となった。集計から外されているが、日本的労資慣行(年功序列賃金制度、終身雇用制度、退職金を中心とする企業内福利制度)は、アメリカ流の国際会計基準導入で総額人件費管理が徹底化され、実質賃金は大幅なダウンとなっている。

連合メーデーは昨年までとすっかり様変わりした。まず労働大臣がこなかった。東京都知事も姿をみせることはなかった。政策提言型労働運動の破たんである。さらに足元は労働組合の存在基盤にかかわる組合費のチェックオフ制度の見直しで揺れている。

これら一連の動きは、連合が民主党一党支持を明らかにし、自民党政治への批判を強めていることに帰因する。自民党にすれば、自分と知っている公明、自由はむろん民主の選挙応援し、親分のおれをないがしろにするとはけしからんとの思いからであろう。

脳天気で朗らかさだけが「売り」の鷲尾連合会長だが、これら一連の自民党の動きに、①労働大臣が選挙運動を口実に、公務を放棄するのであればただちに大臣を辞任すべき、②自民党の意見に従わないものは公権力を使って圧力をかけ労働運動を崩壊させるファッショ的行爲、③チェックオフ禁止は労使自治にもとづく安定した労使関係を崩壊させかねない労働組合否定だと、危機感をあらわにした。

しかし、連合は来年から五月一日をメーデーの日程から外し、四月二十九日に中央大会を開催する。五月一日は中止にするのかといえは、その決断もできておらず、五月一日には東京連合を中心にメーデー記念式典等をおこなう。五月一日、完全にやめてしまえばメイソンの会場の代々木公園を全労連系にのっとられてしまうとの「恐怖」感からだ。

日本労働運動の主流はわれわれだと、連合のメーデー中止に心おどらせる全労連は、①首切りリストラ促進、中小企業倒産あと押し政治でなく、雇用を守って不況を打開する政治、②国民のくらしと社会保障を守る政治、③平和と人権を大切に政治への転換を、全労協は石原都知事発言を糾弾、強権国家への道を止める闘いを訴えた。

またウソを重ねるのですか

許せない！ 保育所統合前の約束破り(下)

半年がかりの要求に対して 新津市へき地保育所保育さんの市職員への身分移管を求めて、去る五月十二日にやっと助役交渉をもちました。これは、昨年十一月に市当局が「平成十一年四月一日に市職員にする」という三年前の約束を不当にも「白紙撤回する」と言ってきた以来、半年がかりでやっと実現した交渉でした。

助役は、初めてへき地保育所の保育さん十八人の前に出てきました。約一時間半にわたる交渉の中で当該の保育さんたちからは、約束を一方的に白紙撤回にされた上、もどる職場もつぶされた怒りを次つぎにだされ、市当局の責任を追究しました。

冒頭、助役からは「この問題の責任のとり方は後で考えたい」「きょうは今まで議会で言った以上のことは言えない」などといいました。しかし、保育さんたちの当然の要求の声を前に交渉の最後には「保育さんたちの切実な声を受けとめた」「市の職員にするということは統廃合の前提条件だったので、市の職員にするよう市長に決断してください」といいますと回答しました。そして市長との協議の結果の回答については「六月議会前に組合へ連絡する」と回答をしました。

働く人の気持ちや市長にはわからないのか！ この交渉でも参加者から「議会で市長は『なぜ市職員にこだわるのか、わからない』と言ったけど、それは行政の責任者たる人の言葉でないと思います」「働く人の気持ちや市長にはわからないのか」との発言がありました。へき地保育所の保育さんたちにとってはたいへんな問題です。

一日も早く、今までの約束を守り「市職員にする」との回答を待っていたのです。職場をつぶすだけつぶしておいて、身分移管の約束は「白紙撤回です」では、行政の責任者のことばではありません。

また、へき地の保育さんはいまも市立保育所に「研修」にいっています。長い人では研修三年目になる人もいます。「市の職員になるんだから市立保育所に研修にいつてくれ」といわれたからです。「市職員になるための研修と言われたが、それじゃ今の研修は何のためなのか」という発言もありました。これでは人手が足りないから体よく研修と言いながら、フルタイムで一馬力の働きをさせてきたことになりません。

市当局は「行革だ、リストラだ」と言っています。新束を守ることは行政の責任者たる市長としての責任です。誠意ある市長回答がのぞまれてきたのですが…。

市長回答は、助役回答をさらに後退させる許せない回答 しかし、六月議会前の市長回答はいつまでたつてもありません。催促を重ね、やっと福祉健康課長から回答が告げられました。それは「市長と助役が協議したが結論がでなかった」という何の前進もないばかりか、五月十二日の助役回答を大幅にバックさせる無責任なものでした。これでは、その場しのぎの回答としか思えません。この回答には納得いかず、市長との直接交渉を要求しましたが、「方針が決まらないうちには会ってもしようがない。それまでは交渉しない」という一方的な交渉拒否の態度にでてきたのです。都合がわるくなると知らんぷりをするようなものです。回答の後退も許せません。

市長は、いろいろなプロジェクトを次つぎに判断したり、各種会合にもこまめに顔をだしてはいますが、この問題に限ってはこれはあてはまりません。なぜなのでしょう。約束を守らせ、安心して働けるよう、またよりよい保育環境づくりのためにも、引きつづき市民のみなさんのご理解・ご協力をよろしくお願いします。

たくさんの署名ありがとうございました。これからもちゃんと約束を守らせるためがんばります。新津市へき地保育所の保育士の市職員への身分移管を約束通り求める署名活動に多数の方々からご協力をいただき、厚く感謝申し上げます。短期間での取り組みでしたが市民のみなさんから八千名にのぼる署名をいただくことができました。今後市市の突然の裏切りともいえるべき「白紙撤回」という約束破りを許さないため、活動していきます。

「日程がない」と署名の受け取りは宙に浮いたままに……現在に至っても市からは何ら具体策も示されないばかりか、最近になって市長は、「市職員化は選択肢の一つだった」などと議会で答弁し、当時の事実さえも否定するかのようになっていきます。

みなさんから、いただいた署名を市長に提出したいと、何度かお願いしましたが「日程がない」と、いまだ署名は受け取ってもらえない状態にあります。とても残念なことです。

しかし、署名活動を通して、多くの方々からの励ましやご協力をいただいたことは、かけがえない宝ものとなりました。会の活動のエネルギーです。約束を守るため、これからも活動をより強めていきたいと思えます。

保育士のみなさんからお礼とお願ひ 突然の約束の白紙撤回でした。目の前がまっくらになりました。こんな人をだますようなことがあってよいのかと涙がでました。市職員化はへき地保育所の統廃合前に市が責任をもつてやります、と言ったことです。白紙撤回というその後になっても市長は一回も私たちとは会ってくれません。不安な日々を家族と過してきました。

署名活動には本当にいろいろご協力いただき感謝にたえません。私たちは初めての新津駅前でのチラシ配りをやったり知人や友人に話して協力してもらいました。また地区の方々も「回ってあげますよ」といって多数署名をもらってきてくださったり、本当に頭がさがりました。署名に何うと「チラシをみたよ、がんばって」とか、「ひどい話だね、負けないで」とかいいろいろ励まされました。これからも約束を守るためがんばります。

またウソを重ねるのですか 新津市は昨年十二月に「就学前児童を取り巻く現状と今後の検討策」という冊子をだしました。これは保育所の現状とこれからのあり方について検討策をのせたものですが、この中に、へき地保育所保育士の身分移管問題についてもいくつか記述がされています。この中には次のように三点の当時の約束などと大きく違うところがありました。この冊子については、全員の市議会議員に配布されたものであることから、保育士さんたちは、それぞれ手分けをして、事実と違う旨の手紙を一人ひとりの議員さん宅に届けてきました。

約束を一方的にホゴにした上に、事実までもねじ曲げようとすることはとても許されるものではありません。

「市の職員にするので安心してください」が「選択肢の一つだった」に急転回 冊子には保育士の身分を市職員にすることを「選択肢の一つだった」と記述してあります。これは事実と違います。統廃合を前に市が言ったことは「へき地保育所は統廃合する。しかし、みなさんの身分は、へき地保育所が半数になった時点、平成十一年四月一日には市職員に身分移管するので安心してください。統廃合がスムーズに進むよう協力してください。」

というものでした。このことはその後の統廃合の地元説明会や市議会でも市はそう答弁してきたのです。

これに対し冊子の説明会が二月にへき地保育所保育士に対してなされた際、保育士たちが「事実と違うので訂正してください」と言ったところ担当の福祉健康課長は「市の職員にしていくと言わなかった、とは申しません。しかし最高責任者である市長が議会でのように答弁している以上、私なり助役が間違った説明をしてきたというほかない。ここで訂正してくれと言われても私の裁量で答弁できることではない」と言いました。市長の言ったことが「絶対」になっているのです。市長は昨年九月議会から突然、「選肢の一つだった」と言いはじめたのです。まったく事実と反しているのです。

さらに大変化 また冊子には、職員採用制度の面や数年来、職員採用をしていないから市民感情や機会均等の観点からも、市職員化はむずかしいなどと記述されています。

しかし、当時はそんな話はありませんでした。採用については「全員同時期に選考の形で採用することになると思う」と助役は議会で答弁しています。まだ、当時は「みなさんを職員にするため、いま採用を抑えています。十一年度には採用できます」といったのに、今になって数年来採用していないから、市民感情や機会均等の観点からも大変難しい、などと書いています。

以上のように次つぎと事実をおおい隠すような動きに怒りがわいてきます。「行革」だからといって何をしてもいいわけではありません。地域の保育にがんばってきた十八名の保育士をその犠牲にはなりません。このやり力が通れば安心してくらししていけなくなります。

◇ドキュメンタリー映画（羽田澄子監督作品）◇

『続・住民が選択した町の福祉 問題はこれからです』

「茨城・下館地域在宅介護を支える会」が上映

秋田県北部のほぼ中央に位置する人口二万四千人、高齢化率二四%の鷹巣町がこの映画の舞台。農業と林業の町である。「介護保険が始まって町も町の福祉は変わらない」「昨年四月開業した」ケアタウンたかのすは全室個室、職員は高齢者を管理するのではなく、対等に近い立場で自立した生活の手伝いをする。「一対一できめ細かく」「縛らない介護」のための人員配置」など、最近新聞・テレビにしばしば登場する。それらの取り組みは、町長と町民の自由参加によるワーキンググループによって、一九九一年から始められた。

映画監督羽田澄子さんは、「安心して老いるために」でデンマーク・スエーデンを取材したとき、「民主主義の土台がなければ本当の福祉は築けない」と痛感。鷹巣町のとりくみはこれに着眼しているという。

この度の映画会をとりくんでは茨城県の「下館地域在宅介護を支える会」。これまで「ほっとひと息井戸端会議」をつづけ、福祉について語りあう活動をおこなうほか、高齢者や障害者向けに下館市の手作りの福祉マップ「ほっとタウンまっぷしもだて」(A4判、百七ページ)を三年がかりで完成させた。楽しい見やすい大きな活字のカラー印刷。屋内外で車椅子対応か、ドアは自動か手動か、トイレの設置箇所、建物の段差等々一目でわかる。日本財団の助成金を利用して発行し、無料で希望者に配布している。

下館市は、無料の福祉バスが市内を巡回し、町並みのところどころでは木製の暖かみのある「ほっとひと息ベンチ」が、かわいいお花とともにみうけられた。小山から一時間一本の水戸線で二〇分のところにある高齢化率一六・一%、人口は約六万六千人の市だ。

映画は二時間〇五分、町民からの自由参加で集まったワーキンググループが町内を、一軒一軒、手さぐりで歩くところから始まる。その熱意が伝わってケアタウンたかのすの建築会社はワーキンググループと一緒に計画・設計をおこないたいと申し出た。数多くの住民の探検隊を組織し、モデルルームを見学、意見や要望を出し合って、計画にたくさんの町民の知恵を出しあい思いが込められていく。しかし、町議会は最初反対もあり難航する。町の福祉を推進していく民生委員でデンマーク・ドイツ視察団を編成。帰国後はデンマークの実践を取り入れた活動が始まる。痴呆症の人の五感を刺激、機能回復のための「感覚の庭」も、住宅改善ワーキンググループが中心となってつくられた。

この度の下館市での映画会は、ここで音声我突然出なくなった。「映写機の故障で、今なおしています。」とコメントが入った。結局、別の映写機を運びこんで試したが、機種があわず、「再上映会を持ちますので」と丁寧な挨拶が……。五〇〇人ほどの入場者、ひと呼吸おいたが、あたたかい拍手で激励した。「次回はどうかわかるかわからない私はその後のストーリー骨子だけでも聞かせて」と質問。驚くほどのすばやさで、冊子を送ってくれた。

映画後半でワーキンググループの成長ぶりが見られるらしいが、冊子は『鷹巣町のワーキンググループ』(A4八四ページ)。羽田澄子監督の映画を制作された株式会社自由工房発行のもの。「鷹巣町の概要」「鷹巣町のワーキンググループについて」「私とワーキンググループ(町民の皆さん四十一人の感想)」「ケアタウンたかのす概要」「鷹巣町福祉資料住民参加のまちづくり」「鷹巣町福祉協議会資料ホームヘルプサービスの概要」「自由工房の出版物とビデオ作品・映画の紹介と解説」等々。その一部分を資料1と2で紹介する。(嘉)

再上映会 七月三〇日(日)午後一時開場、一時半開演、場所は下館市民会館

資料1 映画 続—住民が選択した町の福祉「問題はこれからです」

前作「住民が選択した町の福祉」(一九九七年一月)は、福祉を公約にかかげて当選した若い町長が、住民に参加をよびかけてつくったワーキンググループの活動に支えられて町の福祉が変貌していく様を描いた。

町のホームヘルパーの数は全国のトップレベルにあり、二四時間在宅ケアも行われている。だが、施設の整備は遅れていて、在宅複合型施設であるケアタウン構想が議会に出されるが、反町長派が多数で否決される。町議選を経て、この構想は、一票の差でようやく議会を通過する。映画はここで終わっている。「安心して老いるために」でデンマーク、スウェーデンを取材したとき、痛感したのは「民主主義を土台にしなければ、本当の福祉は築けない」ということだった。北欧の進んだ福祉を生み出した墓盤は、政治・社会のあり方にあるのだ。しかし北欧の福祉のこの点に着目した政治家は、日本にはほとんどいなかった。ところが、秋田県鷹巣町の新人町長・岩川徹氏はここに着目したのだ。彼は本当に「住民参加」による福祉の町づくりを始めたのである。いまや「住民参加」はうたい文句として沢山つかわれている。しかし、本当の「住民参加」がどのくらい行われているだろうか。

私は前作の完成後も町の様子が気になっていたりしゃつと議会を通過したケアタウン構想は、住民の積極的な参加とともに、形になっていく。「住民が選択した町の福祉」を観た人たちからも、「その後、鷹巣町はどうなりましたか」と聞かれる。とうとう昨年(一九九八年)四月から再び撮影を始めた。映画では、その後の町長の考え、議員や議会の対応、住民の活動、そして「ケアタウンたかのす」が機能するまでを追っている。今回はその間に、老人福祉にとって大きな問題となってきた介護保険に対する町の対応もとらえた。

福祉はいまや地方自治体の政治のあり方を決定する大きなファクターである。鷹巣町は首長の強い意志によって、そのことに真っ向から取り組んだ自治体の一つであるいま鷹巣町は、日本ではハイレベルの福祉サービスを自治体として築き上げつつある。だが、町は将来ともにこの福祉を、日本の風上、国情のなかで、維持、発展させることができるだろうか。

「住民が選択した町の福祉」のラストで、ワーキンググループの一人が、やっとハードをつくる条件ができたが、「問題はこれからです」と言っている。同じ言葉が、今の状況にもあてはまると、私は思っている。

(羽田 澄子)

◆映画「問題はこれからです」 十六ミリ(上映時間二時間五分) 貸出料金/一回の上映につき二十五万円(消費税・送料込) 同日中に二回上映の場合三十五万円、三回上映の場合は四十五万円

資料2 鷹巣町のワーキンググループについて(鷹巣町長 岩川 徹、聞き手 羽田澄子)

町政の主人公は住民、それには民主主義が大切

「ワーキンググループ」とは

羽田 鷹巣町の政治を考えるうえで、とても大きな役割をはたしているのが、住民によるワーキンググループの活動だと思いますが、どういう経緯で、ワーキンググループがつけられたのか、この機会に具体的にお話し下さいませんか。

岩川 そうですね。まよめの意味も含めまして、ちやんと順を追って一からいきますか。

羽田 そうしていただいた方がいいと思います。

岩川 本当の原点っていうのはやっぱり私の気持ちなんですよ、これは。あのときは、選挙戦を前にして、この鷹巣町を治めるのは町長ではなくて、もちろん議会でもない、住民がその方向性を決めるべきなんだという思いを持ってました。

羽田 もう、最初から。

岩川 そう思っていました。

羽田 分かりました。つまり従来の町政をみていて、岩川さんの心の中にはそういうベースがすでにあっただけですね。

岩川 鷹巣町の皆さんのもとのいろんな方向性なり、具体的な政策なりを詰めながら、みなさんが感じているものを、考えているものを具現化するという、そういう政治をするべきであって、これは今で言う、住民参加なり、住民主権という言葉になるんですけど、このことはもともと感じてましたから。従って、そういう皆さんの意思に基づいて政策を決めて、それを公約にします、と。

そういう前提で町内を歩いたんですよ。一軒一軒歩いて、皆さんが何を強く町政に求めるのかなと思ったら、一番多く出されたのが老後に対する不安だったんです。当時は秋田県の第二の空港を鷹巣町に建設する運動が、かなりの範囲で行われていただけに、正直云って意外でした。

女の人やお年寄りに老後における安心保障を政治に求めていたんです。同時に悲惨な介護の現場や、町の実態を見ることになりました。

八十代のお婆さんを八十代のお婆さんがお世話してるとか、痴呆状態のお年寄を部屋に入れて、外から鍵を掛けて出られないようにして家族が職場に行つてるとか、介護をするために仕事を辞めたという様な現実を毎日のように見たんです。しかもちょうど冬場ですから、その時の選挙は。

一人で食事の準備をしている男性の八十何歳の姿とか。しかもこの辺は北国の夕方の四時、五時つて段々もう暗くなってきますから。そこで、ひとりで、ストーブにこう、魚をあぶって、これが夕食だ、なんていう姿なんて、これは大変なことですよ。

三、四ヶ月かけて、延べ一万四千五百軒歩いて、住民の生の声を聞いた結果、高齢者福祉が一番重要な公約となったんです。そして結果は三一九票差で勝利しました。当選して、さっそく高齢者福祉に取り組んだんですけど、どう具体的に、実践的にやったらいいかというノウハウは、その時点で私自身は持っていないませんでした。漠然とした、多分こうだろうな、今まではこうだったという、ごくごく普通の知識しかありませんでした。

そこで以前から知り合いの秋田大学のある教授に相談したら、幸いにも教授の幼な友達で、五年間毎年デンマークに高齢者福祉の研修に行っているお医者さんがいることが判りました。教授にお願いで、三人で会う機会をつくって貰いました。

三人で会っているいろいろお話しをしているうちに、伊東敬文さんという人がデンマークに住んでいて、そのドクターの研修ツアーの手配をすべて伊東さんがやってくれるということでした。更に伊東さん自身デンマークの高齢者福祉の研究者であることもわかりました。時々日本に帰ってくるというので、その時に伊東さんに会えるようドクターをお願いしたんです。それでたしか九二年の…。

講演会、懇親会、そしてデンマークへ

岩川 当選されたのが九一年ですね。

岩川 九一年の四月です。最初に伊東さんと会ったのが、九二年の一月の上旬だったと思うんです。東京都内のホテルに伊東さんを訪ねることになったんですよ。会って町の実状や、私の福祉に対する考え方を伝えました。併せてデンマークの進んでいる福祉政策を勉強してみたいということも話しました。そして伊東さんは、先づ自分が鷹巣に行つて、デンマークの福祉について話しをしようということになったんです。それで講演会を開くことにしました。

羽田 最初に講演会ですか。

岩川 そうです。まず、最初に私が行きましよう。デンマークというのはこうなんだ、というのを話ししよう。それで講演会が実現して、次に懇話会を作ろうという話になったんですよ。つまり専門的な立場にある人達による、福祉の町づくり懇話会を作ることになったんです。その後、三月に正式に「福祉の町づくり懇話会」が発足しました。又、その頃伊東さんからデンマークの研究ツアーが企画されていることを知らされ、私は町議会の議長と一緒に参加することにしました。岡本祐三先生が団長で、全部で一五、六名のツアーでした。岡本祐三先生には、その時初めてお会いしました。四月から五月にかけての約二週間、いろいろ見て歩きました。

内容的には、とても日本とは比べものにならない程の数の多さを誇るホームヘルパーさんの仕事ぶりや、使う人一人一人の状態にちやんと合うように調整した上で提供される補助器具。それとあらゆる種類のものを揃えている補助器具センター。又、全部個室化されているプライエム。勿論ヘルパーの二四時間体制もです。

現場が大事、それをを保障する力とシステム

そして一番感心させられたのは利用者委員会です。各施設にはその施設を利用している人達の代表によってつくられた委員会があつて、施設の運営について直接提案することができるとです。提供されているサービスの内容についても、施設で働くスタッフについても、更に運営の仕方や予算の使い方に関してまでも利用者の立場に立って施設側にいろいろ提案するんです。しかもその殆んどが保障されると聞きました。つまりデンマークでは現場を大事にしなれて、当事者のもの考え方や提案されたものが保障されるためのシステムが、しっかりとつくられていたということなんです。民主主義が存在するという事です。このことは、町政の主人公は住民であるという私の考え方と共通するものです。それが私にとって一番の収穫でした。デンマークの福祉は、実は民主主義がそれをしっかりと支えているんだということが良く判り、私は意を強くして帰つて来たんです。

帰国後、デンマーク研修の報告会や町の広報を通じて、町民の皆さんの合意形成を大切にしながら、皆さんの考え方に基づいて町の福祉を進めていこうと訴え、ワーキンググループへの参加を呼びかけました。つまり鷹巣町の福祉政策は、デンマークの物の考え方とか、やり方を参考にしながら、行政と町民と一緒に考え、一緒に進めながらつくり上げることにしたんです。ワーキンググループの方法論については伊東さんから教えてもらいました。

羽田 だから岩川さんが原則としてこういう方法でやりたいという意思を持っておられて、それに、デンマークのホルバック市で行われたワーキンググループ活動の例を伊東さんがご存じでしたから、それだったらこの方式があるという、伊東さんのアイデアというか。

岩川 そうですすね。私の考えてたものに対して、それを具体的にするとすればこうなんだという、方法論ですね。そういうワーキンググループ活動という方法を彼が提案をしてきました。

羽田 そのワーキンググループ活動の方法論ですが、実際にどういうふうな、つまり具体的にはどういう動きになりましたか。

最初はテーマを決めることから

岩川 具体的には、来た人達っていうのは一体何をやらせられるんだという風になりますね、最初は。知らないわけですから。ワーキンググループって言ったって初めて聞く名前ですから。にもかかわらず、六〇人が来たっていうのは福祉という一つのテーマに基づいて、これから鷹巣町をこういう形で一緒に作って行くんだという皆さんが、とにかくやろうということであつたわけですよ。でも正直言いますと、これは後で分かった話ですけど、六〇人が全員諸手を挙げて賛成ということでもなかったようなんです。中には町長は何をしようとしているのかお手並み拝見という人もいたよかったです。

最初はテーマを決めることから始めました。いろんな意見を出して貰い、最終的には多いものから一〇のテーマを決定しました。それから現状を分析し、問題点をはっきりさせ、それに対する解決方法を検討するという進め方をとりました。

それぞれテーマに従って自由に活動を始めながら、すぐできるもの、ちよつと工夫したらできるもの、予算化しなければできないものの三つに分けながら提案を行いました。すぐできるものは提

案と同時に実行しました。勿論住民と行政の共同作業です。福祉施設の提案もあったんですが、これは大物ですから何年かかけながら実現することに決めた訳です。

こうしてワーキンググループの活動が始まったんです。初めに出されたものとして、役場の玄関の自動ドア化とか、役場のテーブルを車椅子の人も使えるような低いものにしてくれというものがありました。それらには私の方ではすぐに予算化を応じました。

これにはワーキンググループの皆さんも驚いたようです。つまり、従来は行政というものは住民の具体的な要求に対しては、検討してみますで終わったものが、ワーキンググループの提案にすぐ応じたという事でびっくりしたようなんです。そしてこの事が行政に対する信頼へと変わっていきました。当然活動も真剣にならざるを得ません。

羽田 役場の人たちはこのワーキンググループというのをどういうふうに受け止めましたか。

岩川 後になって変わっていったんですけど。最初はワーキンググループの皆さんと共同で物事を進めていくというよりは、むしろ一歩下がって、黒子として事務的に整理しながらお手伝いできれば、と考えてたようです。一緒に考える存在じゃなくて、あくまでも住民間のやりとりを傍で見て形良くまとめて、これですよと、そういうお手伝いというか、サポート的な。

羽田 お話し何いながら思ったんですけど、町長が呼びかけて、やりたいという人たちが集まってくるけれども、それはそれで言ってみれば烏合の衆ですよ。つまり、住民運動であれば誰かリーダーがいて呼びかけてやりますから最初から組織的になりますけど、鷹巣のような場合、呼びかけに応じて集まった人達のいろんな意向を汲み出して、役場の担当の係に届けると言う作業は一体どういう形で進められたんですか。

岩川 それは、時々やる全体会で、グループ発表という形で出ますから、それで確認が出来ます。羽田 そこまで行ってしまえばいいんですけど、最初に集まった六〇人に対する働きかけはどういうかたちでなされたのですか。それは伊東さんがなさったのですか？

岩川 進め方ですか。それは、実際の作業はワーキンググループの皆さんが一生懸命にやりましたけど、進め方については伊東さんがレクチャーしました。それを事務的にサポートしたのが役場職員という、こういう関係でした。

ワーキンググループと行政は「パートナー」

羽田 現在、ワーキンググループと行政はどのようなふうを考えればよろしいですか。

岩川 今は互いに良きパートナーという意識を持つていると思います。最初は仕事上やらされていくという気持ちもあったと思いますが、一緒にやっているうちに仲間意識が芽生えてきたんだと思います。

ワーキンググループ方式というものを何年もやっているうちに、職員対住民という考え方も、共に基本は町民であるという考えになったんだと思います。今はいろんなテーマでワーキンググループを作っても、進め方については案外簡単に分かってももらえます。この七・八年間の活動が町民の皆さんにも段々と理解されてきたんだと思います。

結果が見える形で示されるということが重要なポイントだと云うことじゃないでしょうか。

羽田 つまり役場は住民の意向を聞いて物事をやるもんだという風な感じが定着している。

岩川 いやないですか、本当に。大上段に構えてどうこうって言うんじやなくて、見ていますと意外と気軽に声を掛け合ってますよ。今何やってる？ 何か手伝うことありますか？ って感じで。だから特別、役場職員っていう肩書を彼等は意識してないでしょう、今。どっちも町民で住民の考え方を大事にしなから、物事を一緒に進めることからはじめて、行政上の仕事が必要になった時点で大いに職員として頑張っているんだと思います。

羽田 つまり、役場の人もまずは町民ということですね。そういう意識で話し合って、あとは役割分担という形に。

岩川 そうです。今日では福祉以外にもいろんなテーマのワーキンググループがありますが、活動内容について私は細かいところは承知しておりません。それぞれがうまくいっているからです。職員も住民も成長したんだと思います。でも町全体で考えると、まだまだ多くはありません。

羽田 そうですね。撮影のとき街で「ワーキンググループ知ってますか」って聞いたりしましたが、まだ知らない人がかなりいたりしますからね。

岩川 それでも九二年に始まったワーキンググループ活動が七年間で一〇グループに増えたんですから。

代議員制そして直接民主主義

羽田 直接住民の意向を聞くというのはいいと思いますけども、議会との関係はどういうことになりますか。

岩川 残念ながら鷹巣町の場合は対立という関係が生まれました。デンマークに於てはこういうこと

は無いと思います。代議制が正しく機能しているからです。

鷹巣町では議会が正しく民意を反映しなかったことがあったんです。住民の意思が保障されるような議会であれば、直接民主主義という形は必要性がだんだんと無くなっていくと思うんですけど。住民が託した思いを、いつでもちやんと受け止められるような議会であれば心配は無いと思うんですけど。そうでない場合は、代議制を補完する役割として、直接民主主義は有効なものではないでしょうか。

羽田 まあ、そういうことですね。ワーキンググループの人が、町議会選挙のときに、出たい人でなく出した人をと云ってましたけど、これは選ぶ住民の側に全面的な責任がありますね。

岩川 議会が常に住民の意思を正しく反映するものになれば、ワーキンググループ活動自体萎んでいくと思うんです。住民と議会、首長と議会。それぞれ考え方が一致するまでの過程における運動体としての組織がワーキンググループではないでしょうか。ワーキングが出て来ないっていうことは、まだまだ、議会中心主義っていうか、住民の側に正しい意味での決定権が渡されていないっていうことでしょうか。でも最近はいろんな市町村において、新しい動きが出てきているように思いますけど。

羽田 でも、それはさつきもおっしゃったけど、首長が呼びかけない限り、ワーキンググループの意見というのは、政治にどうか、行政には反映されないわけですよ。首長は直接選挙ですけども。行政が乗っかっているのは、やっぱり議会。とにかく議会がうんと言わなければ何も出来ないわけですから、多くはこの構造の中で動くだけで首長が積極的に直接住民に声を掛けるっていうことは、現状ではほとんどないといえるのでしょうか。

岩川 まず、首長が声をかけることはほとんどしないですよ。

羽田 もし声を掛けて、それに住民が応えるようになったら、これは議会が、鷹巣と同じで大騒ぎになるわけですよ。

岩川 そうです。場合によっては地方議員が国の議院内閣制をイメージしてるかも知れませんが、内閣総理大臣というのは国会議員によって選ばれます。ですから内閣総理大臣は常に国会に対して責任を持たなくては行けないし、選出してくれた議員との関係が重要です。

でも首長は住民によって直接選ばれます。議院内閣制ではなく大統領制なんです。首長にとつて忘れてはいけないことは住民ありきということです。その住民に首長が直接訴えるのは当り前のことです。地方議員にも同じことが云えます。共通する重要なことは住民の存在です。

羽田 その辺の認識がね。

岩川 このことは、私もいろいろな所で話んですけども、意外とちゃんと理解されていないんです。

地方が変われば日本も変わる

羽田 そうですね。鷹巣の話っていうのはある意味で全く分かり良くて、非常にはっきりしているんですけども、日本国中で、こんな分かり良いことが分かっているんですよ。

岩川 これからの日本において大事なことは、こういうことを理解し実践できる首長を、たくさん住民自身が誕生させることが出来るかどうかでしょうね。そして、結果として日本が変わっていくんだと思うんですけど。

羽田 そうです、やっぱり、これで地方が本当にならなければ結局日本も変わらざるを得なくなってくるわけですからね。だから、本当にその辺が：

ワーキンググループが政策立案に対してどのような役割をしているかということは今までの話を総合することで結論が出ますね。

岩川 政策立案というのは、基本は住民の意思と住民の存在そのものです。このことを前提として私は政治を進めようという立場ですから、住民の気持ちや考え方を具体化しようとした時が政策立案のスタートです。

羽田 この映画は相当たくさんの人々に見ていただいたんですけど、その感想や細かな質問が、上映会場や電話であります。そのなかで「私たちもワーキンググループをつくりたい」といった言葉が本当に多いんです。

どうも鷹巣町のワーキンググループがよくわかってもらえなかったのではという反省から、今日お話をうかがうことになりました。このワーキンググループが、よくある行政や議会に物申すといったタイプの住民運動として理解されるおそれがあると考えたからです。

鷹巣町のワーキンググループは、行政と対立する活動ではなくて、おっしゃるよう行政とパートナーの関係にあるんですね。

岩川 そうです。それでも町の現実、いったい町長何云っているんだいって言う人は結構いますからね。

羽田 今日本当に有難うございました。

ゲリラ戦から正規戦へ

— 憲法状況の現段階（上） —

国民は「冷静」

「論憲」、「創憲」、「改憲」そして「護憲」と、憲法をめぐる論議は一見にぎやかである。「憲法論議」をあまりそのかしているのが、文芸春秋、中央公論といった雑誌ジャーナリズム、読売、産経の新聞ジャーナリズムだ。しかし、国民は冷静で過敏な反応を今のところ示してはいない。

『ボイス』五月号で、当時自民党幹事長の森喜朗が対談している。そこで森は現憲法を評し、「いまの憲法は、阪神・淡路大震災のあとにつくった仮設住宅」との過激な発言で、改憲への思い語るが憲法論議が盛り上がらないことへのいらだちをこう披瀝してくれている。

「森 憲法調査会の会長の中山太郎さんから聞いた話なんです。『国民のみなさんのご意見を』といって国民に投げかけたところ、ここ数カ月で国民から党に寄せられた憲法に関する手紙は何通あったと思います？ たった四十八通です。」

— えらく関心が低いですね。

森 関心を持っていないんです。

— どうやったらもたせられますか。

森 案をつくって国民に投げかけていくしかないでしょうね。そしてマスコミが大きく批判報道すると、国民に感心を迫ることになる。その意味で、少し先になりますが、憲法論議が選挙のときの対立軸になっていくのかも知れません。」（一九四―五頁）

ここ数年、過激な改憲論をブチ上げているのが大勲位こと中曽根、ET（異星生物）の鳩山由紀夫、狼中年・小沢一郎、そしてナベツネこと読売新聞社の渡辺恒雄である。

一九八〇年代の第二臨調で、中曽根は「世論づくり」のモデルをつくった。国鉄分割民営化に反対する正義の士に「国賊」とレッテルを貼り、国民から孤立させるファッショ的手法である。この手法は一九九〇年代の政治改革Ⅱ小選挙区制導入に、民間政治臨調に引き継がれた。二匹目、いや三匹目のどじょうを狙っているということである。

三つの「改憲軍団」

かつての「改憲」論では、「改憲軍団」が登場した。自民党憲法調査会、新しい日本をつくる国民会議等々であった。しかし、世紀末の現在、「改憲軍団」の様相は大きく変わった。かつては私兵、ゲリラ戦士にすぎなかったのが、正規兵として再編成されたことだ。今年一月に設置された憲法調査会（国会法一〇二条の六、同七）、そして昨年七月、民間政治臨調の後継組織としてつくられた「新しい日本をつくる国民会議（二二世紀臨調）」、そして、今や政府広報紙として「官報」の役割を社是とする世界最大の新聞社、読売である。

憲法調査会は「日本国憲法について広範かつ総合的に調査を行うため、各議院」に設けられた。期間は五年、衆議院五十人、参議院四十五人の構成である。すべての国会会派がこれに参加する。

21世紀臨調は政・財・官・労・学・マスコミの社会上層部を網羅する。憲法問題をあつかうのが「国の基本法制検討会議」で、①国の外交・安全保障・危機管理、②国の統治機

構、③国民の権利と義務の三つの部会が設けられた。

その課題は「二十一世紀の日本のあるべき姿、国のかたち、国民目標の創造に向けて、国の政策、基本法制上の課題を戦後憲法体制の包括的な検証にまで踏み込んで整理」するというもので、二十一世紀臨調は「憲法のあり方」にまで踏み込んだ根本見直しを労使が同じテーブルについて検討するのは、おそらく戦後初めての試み（生産性新聞、五月一日付）と強調している。

「読売」は一九九〇年以降、「読売憲法問題調査会」をつくり、「憲法 二十一世紀に向けて―読売改正試案」（一九九四年）、「憲法を考える―国際協調時代と憲法第九条」（一九九三年）を出版している。さらに今年（二〇〇〇年）五月三日の憲法記念日に『憲法改正第二次試案』を発表した。最大のポイントは「公共の福祉」の概念が大幅に変えられ、「国の安全や公の秩序」の一環とされていることだ。二十一世紀臨調のいう「日本のあるべき姿」「国のかたち」の具体化への一歩である。

今なぜ「改憲」、「論憲」、「創憲」か

自民党は結党以来、「憲法改正」を綱領に掲げ続けてきた。内閣に憲法調査会がつくられたこともあった。鳩山一郎、岸信介、中曽根康弘らの試みは挫折した。憲法は第九六条で「改正手続」について、「各議院の三分の二の賛成で発議。国民投票又は国会の定める選挙の際行われる投票において過半数の賛成」が必要と定めている。一九八〇年代まで「改憲勢力」は、「各議院の三分の二の賛成で発議」の壁を突破できなかったからだ。

状況が一変するのは細川非自民内閣時代、土井たか子が衆議院議長に就任（一九九三・八）と自・社・さがげ三党連立村山内閣（一九九四・四）成立以降のことである。村山氏は総理就任に際し、自民党の条件を丸飲みした。内閣副官房長官として政治の裏方を二千六百日務め上げた石原信雄は、村山内閣成立前後の状況についてアケスケにこう述べている。

「（一九九四年三月三十日の朝）村山総理にこう申し上げました。総理にお任せする以上は、内閣としてこの国を運営しなければいけない。いちばん私が気になるのはやはり安全保障条約の問題と自衛隊の位置づけの問題である。とくに総理は左派の出ですし、社会党は安全保障廃棄論を党の方針としていましたし、自衛隊についてはもともと違憲論が根っこにあるわけです。このことは方針を変えてもらわないと、内閣は運営できなくなる。

それが気になるものですから、このことはすぐ総理に『その点はどうなさるんですか？』と聞きました。それなら総理が『いや、三党でその点は一応、もう方向は決めてある』という。それで『あっ、そうですか』と。『ただ、世間はやはり、総理が就任されて、いちばんこの二つの問題について関心をおもちですよ。だから方向転換をするのであれば、なるべく早い時期に総理の口からそれを明らかにするほうがいいんじゃないでしょうか』と申し上げたのを覚えてますよ。

それなら、『そうですか、それじゃあ、早くやりましょう』と。それでずいぶん早い段階で総理は明言したわけです。しかも、『日米安保条約については、これは継続せにゃいかんということじゃないでしょうか』と私がいったら、総理も『そうだ』と。しかも、本人が公式にいった言葉は『安保条約堅持』になったわけですから、自民党もアメリカ政府もすつかり安心したわけです」（首相官邸の決断―内閣官房副長官石原信雄の二六〇〇日）、中央公論社、一七五―七頁）。

だれがいったのか知らないが自民党の「護憲」派？宮澤喜一は「村山さんがああいう方向転換をしてくれたその結果を、いま我々にはいろんな形で享受している」（中曽根康弘、宮澤喜一『討論 改憲・護憲』朝日新聞社刊、一七五頁）。

自民党が崩壊寸前にあった時、延命に手を貸したのが旧社会党だったことをほうふつさせる二人の語りだ。

小選挙区制が国会で論議されてるさなか、自民党席から「おまえらは集団自殺するのか」とのヤジがとんだ。九六年十月の小選挙区制下ではじめての総選挙で社会民主党と名を変えた社会党はわずか十五議席に転落した。

自民党を中心とする「改憲」勢力はこれで一挙に「両議院の三分の二」の壁を突破する予想外の光明を手に入れた。「潮が満ちる」ように改憲する条件が整ったのである。だから、「改憲」勢力にとって私兵、ゲリラ戦士は必要なくなり、いよいよ国民との「正規戦」に入ったということなのだ。

「経済権益」をどう守る

ここに、「改憲」を急ぐ背景はもう一つある。経済的理由である。日本が世界に占める生産力は、一九六〇年の三%から二〇〇〇年に一八%へと、過去四十年間で六倍も肥えた。アメリカはといえば、六〇%から二五%へと、じつに三分の二もスリムになった。EU諸国は約二〇%である。世界の生産諸力の約七〇%を、世界一九〇ヶ国中のEU（一五ヶ国）、米、日の一七ヶ国が占める。現代帝国主義の第一の基本特徴である。

第二次世界大戦（一九三〇年代）までは、帝国主義諸国は領土拡大、したがって軍事的な拡張策で「覇権」を競い合った。「既得権」擁護をもつぱらとしたのが、イギリス、フランス、新たな「覇権」を求めたのが、独・伊・日だった。アメリカは二つの大戦中、「濡れ手にアワ」で、世界の「覇権」を手に入れた。それが、第二次世界大戦後のアメリカの世界支配・IMF・GATT（ブレトンウッズ）体制だった。

第二次世界大戦は、ヒトラー（ドイツ）・ムッソリーニ（イタリア）、ヒロヒト（日本）、フランコ（スペイン）のファシズム勢力と、「自由民主主義」・「社会主義」勢力がたたかった。今の若者には想像すらできない戦争である。

第二次世界大戦は「自由・民主主義」、「社会主義」勢力の勝利で終わった。ヒトラーは自殺、ムッソリーニは反ファシズム勢力に首をつられた。しかし、日本のヒロヒトはアメリカの対ソ・対中・対朝鮮政策から、「絶対天皇」から「象徴天皇」として延命させられた。天皇延命は、A級戦犯十人を葬るだけで（B・C級戦犯は百単位で処刑）、明治憲法体制は政治的にはほとんど無傷で生き残った。

明治への自民党政治家の想いは強い。自民党には石原慎太郎のようなファシストから神社庁、軍恩連盟、旧満州帝国挫折にウラミを抱く潮流が入り交じっている。それらは自民党政治家の後援組織でもある。したがって、自民党政治家は票のため、リップサービスをくり返す。天皇復権を主張する団体では「日本は神国、神国の象徴は万世一系の天皇」、「教育勅語は古今の精神の現れ」というようにだ。

昨今の森喜朗の発言は、まさに選挙対策そのものだ。時代は新しくなったかのようなようだ。しかし、精神は古い。高度成長という第二の「産業報国」体制の中で、働く者の生き方もつといえは哲学が忘れられたからだ。子ども達の「反逆」はその裏返しといえるのではないか。

◇読者からのおたより◇

存在意義 困難な状況のもと、貴誌の存在意義はますます高まっています。滝野さんの努力に心から敬意を表します。

編集部より 嬉しいおたよりありがとうございます。本号で七七〇号になります。夢のような数字です。スリー・セブンまであと七号。さらにご支援を！

異動 送金が遅くなって本当にすみませんでした。四月三日に職場が異動しました。その関係で何かとバタバタしておりまして、「仕事以外」のことがなかなか手がつけられない状態でしたが、ようやくおちついてきました。

編集部より 私などは編集稼業一筋で約三〇年。激しく動く世の流れの中で、日本の政治は黒くよどんでいます。ジャーナリズムの論評にもそれはあらわれています。さらにご活躍を！

資料ありがとう 大変おそくなりましてお許し下さい。過日は、貴重な資料代として一〇〇〇円少額ですが加えてお送りします。

編集部より お役に立てれば嬉しい。お手伝いできることがあれば、お申しつけください。

どこにも国労がいる！ 四月二三日より鎌倉のベンディング事務所へ命令されました。職場は国労一四名、全動労は一五名の職場です。当局は仕事の事は何も教えず職場規律の厳正についてと称して二四項目の事項を渡してきました。内容は「職場でサンダルをはくはく、点呼中は雑談するな、テレビを見るな、与えられた自分の席に着席すること、机の上に物を置くな」等々、まったく労働者を馬鹿にした対応です。すべて現認をして処分を出すようですが職場の仲間としっかり議論して反撃していく努力をしています。でもどこに行っても国労がいます。がんばります。(神奈川・A) 編集部より J R 東会社のいじめ相変わらずのよう。Aさんの異動のことは聞いていました。久しぶりに勉強会やりましょうよ。

「組合つくりたい！」 地域春闘の労働相談で、やっと「組合をつくりたい」という人が現れました。これを機会に「ユニオン」結成に向けて準備会を立ちあげよう努力しています。機関車なれば走れませんが。国労事業センターの仲間たちも一日中ピラに取り組みました。みんな真剣になつてきています。

編集部より 今、いちばん大切なのは旧地区労的集まりをつくることです。そして「生きた」情報つかむこと。その中で、やらなければならぬ課題がみえてきます。

被災地メーデー 被災地メーデーの賛同ありがとうございます。神戸ではその準備と市長リコールとが重なり、さらに「ひろみ選挙」でドタバタですが、元気でがんばっています。(兵庫・T)

編集部より 被災地「夢メーデー」いかがでした。東京でのメーデー、連合、全労連、全労協を取材。手づくりの運動が求められているとの印象です。さらにご奮闘を！

ILO勧告 ILOが中間勧告を出しました。最終勧告は遅れているようですが。この勧告を国鉄闘争のみならず、日本の労働者、とりわけ未組織労働者の意識にしなくちゃ！

編集部より ILO「結社の自由委員会」の審議は五月末、総会は六月一日です。その時、最終勧告が出されると予想されています。権利意識、高めましょうよ。

高尾山メーデー 今年も高尾山メーデーをやりました。参考までに宣言をお送りします。

山の中でやっておりますので、市民へのアピールは出来ませんが、うちを固める段階ということです。三五名の参加でした。国労、八王子ユニオン、八王子中小労連、八王子勤労者市民センター、全国一般三多摩、全造船日新サービス、トッパンムーア等です。社会通信の方、今失業状態です。でちよつと待つて下さい。(府中・N)

編集部より 資料ありがとうございます。「手づくり」の運動こそ今求められています。さらにご奮闘を！

灰原茂雄さんを偲ぶ ここ二、三年労働運動の大功が次々に他界されました。総評の解体に反対し、同盟主導の労働戦線の右傾化に怒り、闘う労働運動の再構築のために奮闘していた岩井・太田・市川の元総評三顧問、労農派マルクス主義者で、七〇年代に全盛期だった革新自治体の一翼を担った新潟県三条市の元市長稲村稔夫さん。おそらくこの方々は、別の世界から「汚職腐敗」にまみれた今の社会を見てひじょうにいきどおっているとともに、一向に目が覚めない労働者大衆に、「いったい何をやっているんだ」「なぜ闘わないんだ」と声を荒げていると思います。今回、灰原さんがお亡くなりになられたことはとても残念で悲しいことですが、悲しさにずっと浸っていても前進はありません。灰原さんを偲び、「三池闘争」にまなび、闘う労働運動の再構築を目指すべく、「灰原茂雄さんを偲ぶ会」を開催するようになりました。(神奈川・O)